

白内障とは

市医師会、市歯科医師会、市薬剤師会の先生からの、健康よろず話を紹介します。

市医師会の津村清先生に、「白内障」について伺いました。

眼はよくカメラに例えられますが、カメラでいうレンズが眼では水晶体にあたります。透明であるべき水晶体が白く濁_{にご}ってくる病気が白内障です。白内障はさまざまな原因で起こります。先天的な異常、外傷、糖尿病、放射線やステロイドホルモン剤、アトピー性皮膚炎などでも起こります。そして最も多いのは、加齢による老人性白内障です。70歳以上のほとんどの方に起こってきます。今回は主に老人性白内障について説明していきます。

白内障の症状

白内障の初期の症状には、かすんで見える、まぶしくて明るいところでは見えにくい、一時的に近くが見えやすくなる、などがあります。白内障の初期では痛みや充血などはありません。痛みや充血がある場合は他の病気を考える必要があります。



また、非常に危険なことは、視力が低下した場合に、自分で白内障と判断し、放置することです。症状が進行してから眼科を受診すると、他の病気で視力の回復が困難になる場合がよくあります。視力が下がってきたと感じたら、必ず眼科を受診してください。

白内障の治療

薬物治療としては、主に点眼薬が使われます。進行を遅らせる効果はありますが、白内障をもとどおりにする薬は現在ありません。眼内の水晶体の濁りによる視力低下のため、メガネをかえてもそれほど見えるようにはなりません。現在、根本的に治療するには手術しかありません。

白内障手術の時期

白内障の手術時期は、仕事や趣味など日常生活に支障が出てきたときに手術の時期になります。あわてて手術をする必要はありませんが、昔は見えなくなってから手術するような風潮がありました。

白内障の末期で手術をすると、いろいろな合併症が起きやすく、視力の回復が思わしくない場合があります。すぐに手術を考えていない場合でも、定期的に眼科を受診することをお勧めします。手術の一つの目安として、新聞を老眼鏡で読む視力は0・5以上で、車の運転免許の更新は0・7以上必要といわれています。

白内障手術の概要

白内障の手術は格段の進歩がありました。30年前までは水晶体を全てとり（水晶体全摘出術）、分厚いメガネをかけたり、コンタクトレンズを入れていました。その後11mm程度大きく切開して水晶体を出して、代わりに人工的に作った眼内レンズを入れる手術（水晶体嚢外摘出）が行われました。眼内レンズを使うことによって、手術後の視機能が格段に進歩しました。

現在は超音波を使って水晶体を細かく砕いて吸引除去（超音波乳化吸引術）をして、眼内レンズを挿入する

する方法が主流です。眼内レンズは無害で、一般的には一度入れると一生取り除くことはありません。

眼内レンズの登場でコンタクトレンズを扱う手間もなくなり、見え方も自然になりました。また、眼内レンズも今では2つに折りたたんで挿入することができ、切開の幅も6mmから3mm程度になり、小切開での無縫合手術が可能になりました。

他にも眼内レンズは最近ではいろいろな機能を持ったものが出てきています。この小切開無縫合白内障手術により手術時間も30分から15分程度に短縮し、外来手術（日帰り）が可能になりました。

私のところでも平成27年に行った手術の3分の2は日帰り手術でした。また、最近では心臓疾患や脳疾患で使用される抗凝血剤（血液をサラサラにする薬）の休薬をせずに手術を受けられる患者さんの適応が拡大しています。このように白内障の治療も進歩していますので、眼の見え方が変わったなと感じたら、安易に自己診断せずに眼科を受診してください。

